

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

われわれは太陽のエネルギーを享けて生命を保っているのだが、この生命の元元ともいうべき太陽は一つである。水も空気もまとめれば、一つになる。これも地球という大元に吸収される。

何十億年もたてば太陽は燃えつき、同時に地球も消滅するだろうと科学者は告げる。「だから何をしてもだめだ」と涙をこぼしているばかりでいいのか。沙漠化が進んで緑が減る。このままでは危ないと言うならば、誰しもが一本の草木を大切にすることだ。緑を増やすにはどうしたらよいかと工夫することだ。庭のない住居でも何か方策はあるはずだ。「そんなことをしても沙漠化は防げない。国家が、世界がやらねば」などと他への期待ばかりで、自分自身は何もせず、むだ金を遣い、間接的にも自然を荒らすようなことをし、わがまま勝手に暮らしている。

人間の排せつ物を利用し、クロレラを繁殖させて食糧にする。呼吸によって生じる炭酸ガスを使い、酸素をつくりだす。こうしたリサイクルを徹底しようとして一所けんめいに努力している人たちに無関心なのは、毒蛇や人喰鯨にも劣るであろう。いや彼ら動物たちのほうが、自然の秩序を守ることにおいては、人間よりもはるかに忠実なの



地球の危機を防ぐ大道

丸山竹秋

である。

このように地球倫理とは、環境破壊や資源の減少その他の大問題とともに生起するであろう地球の危機を防ぐ大道なのである。この地球上の誰もがすべて実行しなければならぬ仁道大義であり、原理原則なのである。例外はない。「大道すたれて仁義あり」と老子は言った。大道とは無為自然（作為のない自然のみち）のことだが、まさに現代人は人類のわがまま、利己（エゴ）の跳梁するところ悪知恵と悪行との跋扈となり、潰滅に向かいつつあるのではないか。

日本人はどうか。超経済大国のぜいたくな暮らしにうつつをぬかし、未開人もひんしゆくする性の乱行に白昼夢を演じつつある。自分自身の尊厳さを忘れ、外国の人々をあなどり、自国の歴史を深く学ぼうともせず、我利我利の享樂を追い求めるあまり、物を粗末にして、さながら火薬庫のまわりを尻に火をつけて踊りめぐるっているような実情ではあるまいか。

人間は対立し、争うこともあるだろう。争いの芽は、なかなか摘み取りにくいとさえいわれている。腹の立つこともあるだろう。憎むこともあるであろう。

しかしわれわれは、どちらに向いているのか。暗黒面か光明面か。時には、いやしばしば、この「すべての元は一つ、同じ根である」との厳然たる事実（万物基一の原理）を互いに想い起こして、光明に向かうのではないか。

『世紀の歩調』より